

## 【資料紹介】

### 島田市相賀地区における考古資料と 中世石塔について

主任学芸員 篠ヶ谷 路人

#### 1. はじめに

平成 19(2007)年6月、島田市相賀杉沢の禰宜地地区において、島田土木事務所による急傾斜工事の計画が持ち上がった。このあたりは、埋蔵文化財包蔵地として「相賀古窯」が登録されているが、採集された遺物はなく、調査されたこともない。このため平成 19(2007)年 12 月 18 日から 28 日まで、遺跡の有無を確認するために確認調査を実施した。山裾に 6 本のトレンチを入れたが、遺構は確認されずに確認調査を終了した。

このとき、同地区の洞源寺周辺を散策したところ五輪塔や宝篋印塔など戦国期の中世石塔を確認、山茶碗や常滑焼破片等を採集した。中世石塔については、実測作業を行い、当時簡単な報告を作成したものの一般に公開することはなかった。

近年、千葉山周辺の中世調査を実施し、久しぶりに相賀地区を踏査したところ、管理者の世代交代等が行われ石塔の一部が廃棄されたことを知った。この機会に図化した資料を公開するとともに、相賀地区の中世史についてふれてみることを目的とする。

#### 2. 遺跡の位置と歴史的環境(第 1・2 図)

相賀杉沢地区は島田市北部に位置し、東側に千葉山、西側に檜峠がある山地の間に相賀谷川が流れ、谷川によって形成された谷底地形である。谷川によって運ばれた土砂により細長く平野が形成され山裾にそって街道が通り、上相賀から藤枝市北部の滝沢へ抜ける。また、手前の和田から後畑、千葉山に向かうルートもある。集落は街道沿いの山裾に分布しており、南北に細長い約 4km の距離となる。

遺跡の分布はほとんど知られてない。埋蔵文化財包蔵地としては、唯一杉沢に「相賀古窯」のみ「古代・中世の窯」として登録されているが、遺物は須恵器として記載され、詳細については不明である。

寺院は、上相賀地区に延命地藏を本尊とした養徳寺、杉沢地区は馬頭観音を本尊とした洞源寺、国本地区には地藏尊を本尊とした瑞雲寺がある。『島田風土記』によれば、いずれも創立が万治 2

(1659)年以前とし、詳細は不明である。なお、石塔調査を実施したところ、養徳寺では一石五輪塔、瑞雲寺墓地では宝篋印塔笠、小型五輪塔水輪、一石五輪塔 4 基を確認、特に洞源寺周辺には宝篋印塔・小型五輪塔・一石五輪塔など約 30 基を確認した。これらの石塔は戦国時代まで下ることから、戦国期より創立したことが想像される。

神社は相賀地区内に八幡神社・杉沢神社・雄柄神社などがあったが、明治以降杉沢の白山神社に合祀された。白山神社は、代々石田家が神職を務め、『駿河記』によれば、建久 2(1191)年に加賀国より勧請したと伝えられる。当初は高山の中腹に社があり名称を高山権現としたが、応永年間に白山権現とし、大正 2(1913)年 12 月に移築した。

明治 21(1888)年の『志戸呂焼沿革に関する報告書』や大正 14(1925)年に刊行された『榛原郡史』では、志戸呂焼が神座・相賀の村で生産されていたことを伝えている。神座は慶雲寺南側の沢で大窯期(15 世紀後半)の遺物が採集されている。『静岡県窯業史』で報告され、『上志戸呂窯発掘調査報告書』では採集遺物について公開され、上志戸呂古窯との関連が指摘されている。相賀古窯については、場所が特定されておらず、詳細は不明である。

相賀地区は、中世段階より古窯が築かれ、石田家と戦国武将との関わりのある地域であったことがうかがえる。

#### 3. 考古資料について(第 3・4 図)

##### ○確認調査により出土・採集した遺物

調査により採集・出土した遺物のうち、実測可能な遺物について 9 点を図化した。詳細は一覧表を作成したので参照していただきたい。以下概要について記述する。

(1)～(4)は鎌倉時代 12 世紀の山茶碗類の破片である。(1)は小皿、(2)は碗の底部破片、(3)は甕の下半部、(4)は陶錘である。いずれも石田家西側の元屋敷と呼ばれる畑から採集したものである。

(5)は常滑焼カメの首付近の破片である。口縁部の破片がないので詳細な時期は不明だが、色調が明るく、12 世紀から 13 世紀代のものと考えられる。確認調査 1 トレンチより出土している。

(6)～(9)は志戸呂焼の破片である。(6)は香炉、(7)は播鉢口縁部、(8)は天目茶碗底部、(9)は丸碗底

部破片である。いずれも江戸時代のもので、18世紀から19世紀に位置づけられる。

山茶碗類は、石田家元屋敷で採集されたが、山の斜面を削り茶畑となった農道より出土している。ここは埋蔵文化財包蔵地「相賀古窯」のすぐ南側に位置する。今回紹介した遺物は製品だが、同じ場所では変形した甕の破片や重なった山茶碗片も採集されている。このような製品は流通したものとは考えられない。したがって相賀古窯の製品と考え、12世紀代の登窯と考えておきたい。

常滑焼の甕は、禰宜寺の跡地として伝えられている場所から出土したものである。周辺には石仏や住職の墓標などがある。このようなことから中世墓の蔵骨器破片と考えられる。

志戸呂焼類は、天目茶碗を除いてあとは小破片の生活道具である。この地域では志戸呂焼の窯跡の伝承があるが、積極的に窯の存在を特定する要素は見られない。優品の天目茶碗があることから、石田家で使用されたものかもしれない。

#### 4. 石塔について

##### ○中世石塔(第4・5図)

中世石塔は、禰宜寺住職墓地及び禰宜寺墓地、坂田家裏山の地ノ神、洞源寺墓地及び洞源寺無縁仏の3か所で確認された。内訳は、小型五輪塔3個体、宝篋印塔3個、一石五輪塔22個体、総数39基を実測した。このなかで明らかに同一個体と思われる石塔はセットとして掲載し、30番まで番号を付けた。大きさなどは一覧表を作成しているので参照されたい。一石五輪塔については、河合修氏の分類(河合1998)を参考として以下、それぞれ地点ごとに説明する。

##### 禰宜寺住職墓地(第4図1~3)

禰宜寺住職墓地では小型五輪塔火輪(1)・水輪(2)と一石五輪塔(3)を確認した。小型五輪塔1個体分と一石五輪塔1個体となる。火輪の軒は平坦で水輪も低い。一石五輪塔は細身で水・地輪を欠損して詳細な分類は不明である。

##### 地ノ神横(第1図4)

禰宜地住職墓地から西側の窪地に地の神が祀られている。そこに完形品の一石五輪塔1基(4)があった。砂岩製で火輪の軒が張り、水輪も丸みがある形

態となる。河合分類の2類16世紀中頃以前と思われる。

##### 禰宜寺墓地(第1図5~12)

禰宜寺住職墓地から東側の沢を隔てた平坦部に墓地がある。このなかに宝篋印塔相輪1・笠2・塔身2・基礎1、一石五輪塔5基を確認した。宝篋印塔は笠が3つあることから3個体分あった。相輪(5)は沈線で九輪が描かれ、笠の隅飾は無文である。一石五輪塔は(9)と(10)は火輪の軒が張り、水輪に丸みがあるので河合分類3類、(8)は軒が下がり、水輪が平坦になるので4類16世紀後半となる。(12)は区画がなく未製品か代用品であろう。

##### 洞源寺墓地(第1図13~15)

禰宜寺住職墓地より100mほど西側にある洞源寺墓地内より宝篋印塔笠と一石五輪塔2基を確認した。宝篋印塔笠(13)は隅飾がなく無文、小型で16世紀代、一石五輪塔はいずれも火輪の軒が張らず、水輪も平坦となることから4類16世紀後半となる。

##### 洞源寺無縁仏(第5図16~30)

小型五輪塔2個体、一石五輪塔13個体を確認した。この資料については、平成19年度時点で確認したが、その後廃棄されてしまった。

小型五輪塔は、空風輪の形状が宝珠状のものと扁平なものがあるが、火輪の下部が平坦で水輪が扁平なことから、16世紀代でも前半に位置づけられる。(16)がやや大きく古手となる可能性がある。

一石五輪塔は、(30)は火輪の軒が張り、水輪が丸く河合分類1類、(20)・(24)は火輪の軒が張り河合分類3類16世紀中葉、あとは4類~5類16世紀後半となる。(28)・(29)は火輪の隅がコの字に立ち上がり7類~8類の17世紀前半となる。

以上が確認した中世石塔である。中世石塔は古式石塔(13世紀から15世紀中葉)と新式石塔(15世紀後半から16世紀)に分類される。今回確認された石塔はすべて戦国期の新式石塔である。一石五輪塔は、洞源寺無縁仏の(30)が細身で形状がしっかりしており古手となり、全体的に16世紀前半から中頃にかけてのものが主体となる。河合分類の6類は確認されていない。石塔が確認された場所は、寺院跡や寺院、墓地・無縁仏など周辺より持ち込まれた可能性が高い。周辺には、神職に関連した「禰宜地」

の地名があり、白山神社の神職を代々努めている石田家の屋敷もある。次に石田家古文書資料から石塔が祀られた16世紀代の相賀地区を検証してみよう。

## 5. 古文書資料について

### 石田家の古文書資料

石田家の古文書資料は今川義元・今川氏真・穴山信君(梅雪)の判物である。市史編纂委員の山田富久氏が『島田風土記』(2003)のなかで詳細に解説されているので参照されたい。

「今川義元判物」:弘治2(1556)年、今川義元は「相賀高山禰宜名職の事」として禰宜惣七郎にあてたものである。内容としては、今より過分の増分を認めること、神田・修理田・山屋敷は先の判例の如く間違いなく永くその所有を認める。大鋸1丁の使用を認めるが、物を作って賃銭を取ることや細工などは認めない。屋敷地の免税などである。山田氏は、「先の判例の如くの記述から義元が新たに保証したのではなく、以前から認められていたことが窺える」と指摘している。

「今川氏真判物」:永禄5(1562)年、今川氏真は「相賀高山禰宜名職の事」として禰宜惣右衛門にあてている。内容は先の義元が保証した増分や所有を認めることに加え、森竹林の事として規制をかけるとともに免税を認めている。

「穴山信君(梅雪)判物」:天正8(1580)年、穴山信君(梅雪)が石田惣七郎にあてた朱印状である。内容は、石田家付近の「鈴木島」を開発した土地の付与と年貢についてである。

以上のことから、駿河の国は、永禄3(1560)年、桶狭間で今川義元が討たれた後、永禄11(1568)年には武田家の駿河侵略により穴山梅雪が江尻城主を務めるなど不安定な時期を迎える。その都度、石田家に判物があてられていることは、石田家がこの地に強い影響力を持っていたことが窺える。

### 5. まとめにかえて

平成19(2007)年の確認調査の報告と踏査により確認した中世石塔について紹介させていただいた。ここで改めて確認調査の結果と石塔について若干の考察を述べてまとめとしたい。

現在の石田家東側から採集された山茶碗類の破片は、相賀古窯の製品と考えられる。小皿・碗・甕・

陶鍾などの器種が確認されており、12世紀前半に位置づけられる。この時期の周辺地域での窯跡は、伊太地区の旗指古窯群アザミ沢古窯、湯日地区丸山古窯、横岡地区のきつね沢北古窯などがあげられる。旗指古窯の終末となり、伊太地区から他の地区に工人が移動していることがうかがえる。

平成6年(1994)、千葉山智満寺の発掘調査を実施しているが、本堂床下より火を受けた山茶碗・青磁片が出土した。また、本堂西側より瓦溜を確認し、焼けた瓦片が多量に出土した。このような状況から智満寺が焼失したことが考えられる。智満寺の参道である大津丁仏参道入口にある山王前遺跡でも、12世紀代の建物跡を検出したが、やはり焼失した痕跡を確認している。この二つが焼失したことは、偶然ではなく、戦火によるものであろうか。旗指古窯が千葉山智満寺から多くの支援を受けていたと考えられており、先の工人が移動する結果となったのだろう。白山神社との関りから相賀古窯が成立したことが想像できる。

中世石塔類については、洞源寺無縁仏の一石五輪塔2基を除いて16世紀代に位置づけられる。寺院や墓地に持ち込まれたものもあるが、この地域が「禰宜地」と呼ばれ禰宜寺跡や石田家元屋敷、白山神社があることから、石田家関係者の墓標・供養塔と理解される。現在の石田家墓地は、白山神社西側の小高い山地平坦部に祀られているが、古い石塔は見られない。屋敷地の西側に禰宜寺跡地があり、ここに祀られていたのだろう。白山神社・石田家屋敷・禰宜寺と山裾の平地に戦国時代は立地していたことが想像される。

この地を東に進むと滝沢から葉梨・花倉地区へと藤枝市北部に通じる。南北朝期、今川氏の拠点となった地域である。花倉地区の遍照寺は今川家二代範氏とその嫡男氏家の供養塔がある。長慶寺には3代目泰範が祀られている。智満寺から大津に抜ければ今川範氏供養塔を祀る慶寿寺がある。今川氏ゆかりの寺院が多い。一方、相賀から西側は天正の瀬替えにより大きく地形は変貌したが、大井川を渡り牛尾山麓に通じ、大井川を渡り今川氏家臣鶴見氏の拠点である横岡、さらに大代を抜けて掛川に抜ける。

義元が桶狭間で討たれたことにより、駿河遠江の国堺である大井川流域は、武田氏の駿河侵略から武田・徳川との境界争いとなる。市内でも有力寺院である静居寺や東光寺にはこの時期今川・武田の

判物が発給される。やがて武田氏の滅亡、徳川の支配、豊臣政権の介入など、目まぐるしい時代の移り変わりがある。石田家と石塔群は、この時期に主要ルート状に位置していることから、街道を管理・運営・監視等重要視されていたと考えられる。

以上、思いつくままではあったが、調査した結果をまとめてみた。今回紹介した資料が相賀地区の中世資料の解明の一つになれば幸いである。

#### 【参考文献】

- ・『志太地区神社誌』静岡県神社庁志太支部 1976
- ・河合 修「共養塔の形態と変遷－特に西駿河の一石五輪塔について－」『静岡県考古学研究 30』1998
- ・『島田風土記ふるさと大長伊久身』島田市教育委員会 2003
- ・『史料島田風土記一大長・伊久美一』島田市教育委員会 2004
- ・『東光寺五輪塔遺跡』島田市教育委員会 2006
- ・『石造物研究会会誌 日引 第9号 一石五輪塔の諸問題』石造物研究会 2007
- ・松井一明 木村弘之 溝口彰啓 篠ヶ谷路人 椿原靖弘 「駿河中・西部地域の中世石塔出現と展開－静岡県下における中世石塔の研究 3－」『静岡県博物館協会 研究紀要第30号』静岡県博物館協会 2007
- ・『石造物研究会第10回研究会資料 東海地域における中世石塔の出現と展開－花崗岩製石塔と在地産石塔－』石造物研究会 2009